（研究報告）

居寝室における居場所のつくり方に関する研究
～大学生を対象とした分析から～

石井研究室　嶋田朋子

1．研究の背景と目的

本研究では、大学生を対象として、その居住様態、特に居寝室における居場所のつくり方を明らかにすることを目的としている。特に一人暮らしの大学生では、多くの生活行為を同一の空間で行うこととなる。面積的にはそれほど豊ではないと考えられるこれらの居住環境の中で、どのように家具等を用いながら居場所をつくり出し、その中で滞在しているのかを明らかにすることで、人と場の形成に関わる基礎的な知見を得ることにもつながることと考えられる。

今回は、特に大学生の居寝室での暮らし方、居場所のつくり方の実態を生活行為との関わりの中から明らかにすることにより、居場所形成における空間の利用状況を把握する。

2．調査の方法

調査は2001年9月にＴＫ大学の建築学科2年生を対象に行われた演習課題の分析および11月に行われた補足の調査により構成されている。調査1では、課題「自分の部屋・居場所」によって、描かれた実測図面を対象として分析した。調査2では、部屋の利用実態に関するアンケート調査と調査1で得られた図面への居場所等に関する補足記入調査を行った。

調査の分析対象数は、調査1においては164人、調査2のアンケート調査では142人、調査2の図面分析は139人となっている。

3．調査対象者の居住様態

今回の対象者の居寝室部分の平均面積は、約11.3㎡であった。一人暮らしの学生が半数を超えており、居寝室部の床のタイプは、フローリングが約7割、畳が約3割であった。畳の部屋でも、布団利用が45%を占める一方、ベット利用も半数を超えた。フローリングタイプの部屋では、布団が15%弱と少なくベット利用が60%を超えた。

4．居場所の形成と物的要素との関わり

「自分の部屋で一番いる時間が長い場所」での身体の様態を調査図面より分析すると、「寄りかかる、もたれる」、「座る」、「寝転ぶ」、「腰掛ける」などの様態が挙げられる。

表－1　居場所形成を支える物的要素との関わりとその割合

	支持要素	座	姿勢	人数（人）	割合
背もたれ有	座椅子	―	座る	18	12.9%
	ソファー	―	座る	20	14.4%
	椅子	―	座る	14	10.1%
	壁	床・ベット	座る	14	10.1%
	ベット・ソファー	床	座る	11	7.9%
背もたれ無		床	座る・寝転ぶ	34	24.5%
		ベット・ソファー	寝転ぶ	22	15.8%
		ベット	腰掛ける	6	4.3%
合計				139	100.0%

さらに、その様態と物的要素との関わりから、背もたれの有無、座、姿勢に着目し、表－1のように類型化した。

背もたれとなりうるものとしては、座椅子、ソファー、椅子、壁が挙げられ、座としては大きく床に座るか、物に座るかに分けられる。座椅子を含め、床に身体を置いている割合は52.5%となっている。ベットが椅子や背もたれのかわりとして利用されている事例も少なくないことがわかる。

また居場所の形成に大きな影響があるものとしてテレビに着目した。テレビは視覚的に方向性をもち、身体の向きを決定する大きな要因のなりうる。本調査ではテレビの所有率は88.0%であり、居場所がテレビに向かっている事例はテレビ所有者の97.6%を占めている。ベットや布団を居場所にし、テレビに身体を向けている事例もみられた。

5．事例考察

以下では、3つの事例を通して居場所の作り方をみていく（図－1）。

事例1は最も多くみられた「背もたれ無／床に座る・寝転ぶ（クッション等の利用も含む）、テレビ有」のタイプである（24.5%）。背もたれが無い代わりにテーブルか、床に寝転がって自分を支持していることが多い。その中でも特にテレビに身体を向けてテレビと自分の間にテーブルを配している事例が目立つ。また、テレビを所有している場合、自分が必要とするもの、

よく使うものなどがテレビの有る壁側に置かれ、そちら側の壁を充実させる傾向がある。片側だけを充実させていることで、自分の居る側にスペースができてくつろぐことができたり、それを眺めることでくつろいだりもしているようである。

事例2は、ベット利用の特徴的な事例である。この事例の学生はテレビの方に身体を向けるため、枕とは反対のベット上に腰掛けている。この事例以外にも、上の布団をたたんで寄せて座っている事例、ベットの近くにテーブルを置いていない事例もみられた。これらの事例では、ベットが就寝場所としてのみ使用されるのではなく、時にソファーやテーブルの役割も果たし、さらにはテレビを見るための場所、食事を取るための場所にもなり得ることを示している。ベットは床とは高さが違い、また面積的にも居寝室の中のある程度広さを占めているため、状況に応じた使われ方を可能としている。

事例3では、テレビを所有していないことから部屋に方向性があまりみられない。テレビを所有していない事例（17例）の図面分析では、直接的な目的が描かれていない場合、一見図面からでは、そこでどのように過ごしているのかわかりにくい。様々な行為との関係性において居場所がつくられるため、特定の方向性をもちにくい。直接的な目的としては、パソコンや音楽鑑賞が挙げられるが、音楽鑑賞の場合には近くに居なくても聴くことができるため、コンポの位置は居場所に大きな影響を与えない。しかし、スピーカーを自分の方へ向けているなどの工夫はみられる。

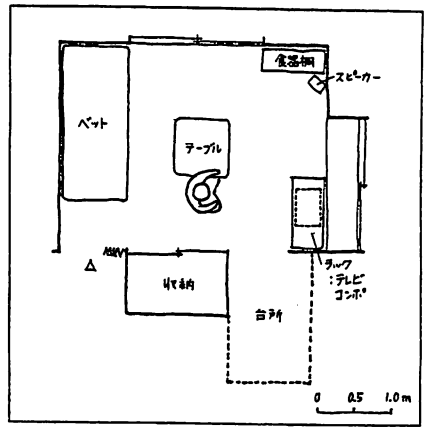
多くの居場所の形成は、主にテレビの向き、ベットの使い方、部屋自体の形態に大きな影響を受けていることが明らかになった。

6．まとめ

比較的多様な居場所つくり方が予測されたが、結果的にはきわめてパターン化たものが抽出された。面積的な要因とテレビの存在が、居場所のつくり方を大きく左右していることがその理由として挙げられる。しかし、その中でもベットにはあらゆる利用のされ方がみられ、その場での居方は多様であった。様々な行為は物的要素との関わり方、支持のされ方によって決定された居場所を中心として展開しているものと考えられる。

〈最も多いタイプ〉

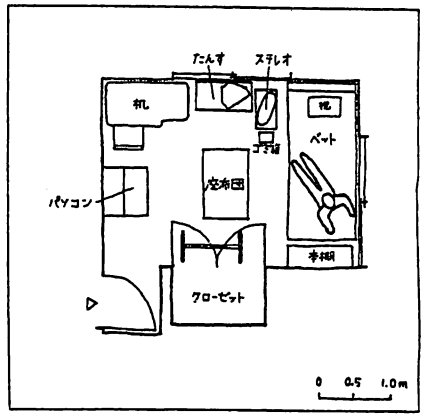
事例1	背もたれ無／床に座る・寝転ぶ（クッション等の利用も含む）
	テレビ有



①136 ②男 ③9．7㎡ ④一人暮らし ⑤畳 ⑥ベット ⑦コンポ、本

〈ベット利用が特徴的なタイプ〉

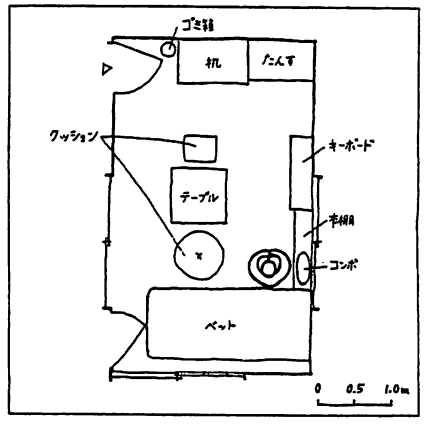
事例2	背もたれ無／ベットに腰掛ける
	テレビ有



①50 ②男 ③9．6㎡ ④実家 ⑤フローリング ⑥ベット ⑦音楽、ベット

〈テレビを所有していないタイプ〉

事例3	背もたれ有／ベット・ソファーにもたれる
	テレビ無



①26 ②女 ③11．6㎡ ④実家 ⑤フローリング ⑥ベット ⑦日光、温度、音楽

※①サンプル番号 ②性別 ③面積 ④住んでいる形態 ⑤床のタイプ ⑥就寝場所 ⑦くつろぎを支える要素

図－1 居場所のつくり方の3事例